合同句集　響焔Ⅲ　―響焔四〇〇号記念―
（平成十三年十月一日発行）より抜粋

ピアノ

米田　規子

芋の煮ころがし幸せ中くらい

裸木がぎらりと光る風の中

春の雪ブラックコーヒーすき透る

スキップが上手にタンポポとびとびに

少年のこころの世界銀杏散る

シクラメンだあれもいないような午後

春キャベツ刻んで刻んでパリ想う

若楓子に頼らるはいつまでか

しなやかにバレエのポーズ今年竹

夏柳夕暮れどきに落ち合いて

良い知らせトンボ右から左から
日常を少し抜け出てポインセチア
どこからかひとりになりて冬木立
絵画的フランス料理はなぐもり
花マロニエ美術館出て水を買う
夕立のあとすき透りドビュッシー
母からの赤いセーター年つまる
五十代近づき紅梅ふっくらと
風光る海岸通り一丁目
レッスンの少年帰る夕焼けへ
ベネチアングラスの館黒揚羽
秋の日のピアノの上にダリ画集
二０００年の足音聞こえ紅葉山
柚子味噌の作り方聞き柚子五つ

フルーツパフェの長いスプーン女正月

花水木きのうと違う風の音

雨の日のポンポンダリア逢いにゆく

桑の実を噛み山育ち海育ち

ふるさとの梨さくさくとこころの灯

冬夕焼肩やわらかくピアノ弾く

合同句集　響焔Ⅳ　―響焔五００号記念―

（平成二十二年十月一日発行）より抜粋

あいまいに春

米田　規子

あきらめとも違う遠くの春の山

水温むそれぞれ好きなことをして

こな・さとう・たまご攪拌春なかば

夏椿やさしいことばのひとつひとつ

はらっぱの木馬に手綱夏めきぬ

橋の上もっとも涼し亀の首

遠くでテロ白桃匂う夜の卓

体内を風吹き抜ける蓮の花

考える順番ありて日短か

雨の日のポインセチアと長い手紙

ねむりいる赤子真ん中初景色

チョコレートと軽い音楽花疲れ

伸びて伸びてすとんと落ちる春の夢

三人のちから関係冷奴

よるの雨鯵の尾鰭に化粧塩

茄子の花猫にも日課あるらしく

一日のはじめゆっくりラ・フランス

健やかにものを噛む音寒の入り

中年や長い地下道出て真冬

真剣に遊んでおりぬ春帽子

青鬼火あおくぽかんとひとりなり

面影を辿ってゆけば暑い夏

星のようにフルーツサラダ夏休

新涼のひくりと猫の尻尾かな

赤や黄の落葉その先考えず

疾走の真っ赤なバイク冬木の芽

あいまいに春来て大皿のパスタ

八月の青空大きな円の中

逢うときのためらい少し仏桑花

どんぐりを拾い茫茫たる往時

合同句集　響焔Ⅳ　―響焔六００号記念―

（平成三十年三月三十日発行）より抜粋

きらきらと

米田　規子

茫々と梅咲くころを父の国

春昼のさみしいときの赤い色

傷口にまだ熱のある修司の忌

森深く夏の少女は魚である

ことのほか空美しく更衣

万緑や全身に水ゆきわたり

やや傾いて精神とラ・フランス

たれかれと心地よい距離金木犀

晩秋の隅っこインド料理店

十一月まっすぐ海に突き当たる

はたらいて少し休んで冬木の芽

餅のびる平和な国の一家族

春遠く両手に包むティーカップ

軽いほうを選んでおり涅槃西風

もう少し色加えたき桜冷え

きらきらと三日遊んで鉄線花

百日紅まひるの闇に息をして

片陰をいくつ拾えば大東京

蟬時雨大きな穴を埋められず

一杯の熱い珈琲いわし雲

猫一ぴき二ひき十ぴき月明り

黄落期眠りの中に川流れ

ひと束の十年過ぎぬ冬帽子

しんしんと大陸枯れる犬走る

赤い酒とろりと甘く枯木星

ものの芽やいちにち雨の音の中

ゆったりと豆煮る時間ヒヤシンス

捨てるもの捨て春の山登りけり

じゃがいもの花紛れも無き日常

けんめいに同じ時間を泳ぐなり